

3
部落問題文芸・作品選集

安政二

部落問題文芸作品選集

第3卷

松林伯円 安政三組盃

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三卷

昭和四十八年五月十六日発行

定価 一、六〇〇円

発行者 松本富夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二丁目二二番一五

電話 〇三(七二六)六(五)一五(代表)

振替 東京 七八四九八番 一五二

落丁、乱丁本はお取替いたします

安政三組盃

目次

- 第一席 津の國屋お染錦繪羽子板に出る事、並に佐竹の太守お染を御寵愛の事……………(一)
- 第二席 お染大醉して亂暴を働く事、並に津の國屋の小僧繁三奇才の事……………(三)
- 第三席 繁三の才智却つて主家を逐はれ親に勘當を受くる事、並に繁三上野山内に入つて破格の出世をなす事……………(四)
- 第四席 杉田大藏故主を怨まず却つて舊恩に報ふ事、並におそめ大藏に戀慕の事……………(六)

第五席

お染大藏未來を約す事、並にお染別莊に終夜賊を翻弄する事……………

(八二)

第六席

三人の小賊召捕りの事、並にお猿子嘉吉を欺いて立ち所に母の敵を討つ事……………

(九八)

第七席

お染柳橋より藝者に出る事、並に小染大藏二世を交し互に派手を競つて樂しむ事……………

(一二六)

第八席

與力鈴木藤吉郎戀敵杉田大藏を陥入れる事、並に大藏上野山内を放逐され江戸を立去る事……………

(一三五)

第九席

小染熱海へ湯治の事、並に鈴木藤吉郎小染の後を逐ふ事……………

(一五五)

第十席

小染終に藤吉郎の心に従ふ事、並に新町奉行跡部甲斐守民情視察の事……………

(一七五)

第十一席

跡部甲斐守深夜構内見廻りの事、並に小村井の梅園に遠乗して臈仲間幸吉の身の上を糺す事……………

(一九六)

第十二席

渡邊源次郎父に代つて佞人と忠國をなす事、並に源次郎
わたなべげんじ ちちにかは ねいじん けつさく こと ならび げんじ ちち
 暴れ馬を押へて幼児を助くる事……………(二三)

第十三席

有屋の娘お朝源次郎に戀慕の事、並に篠原大助源次郎の
ありやのむすめ おあさげんじ ちち れんば こと ならび しのはらだすけ げんじ ちち
 素性を語る事……………(三四)

第十四席

戀の爲におあさ戀を抛つて源次郎を慕ふ事、並に源次郎
こひのため おあさ こひをなげう げんじ ちちを した こと ならび げんじ ちち
 篠原夫婦を斬つて身の素性を蔽ふ事……………(二五)

第十五席

源次郎實の親に對面の事、並に源次郎鈴木藤吉郎と改名
げんじ ちちの おや たいめん こと ならび げんじ ちち とうきさら ちち かいめい
 與力上席に立身の事……………(二七)

第十六席

原幸吉藤吉郎方へ縁切りの無心に来る事、並に藤吉郎幸
はらかうきち とうきさら ちち へんきり の むしん くる こと ならび とうきさら ちち さい
 吉を殺害の事……………(二八)

第十七席

鈴木藤吉郎の身邊愈々危うき事、並に藤吉郎危急を察し
すいき とうきさら ちち の しばん いく あや こと ならび とうきさら ちち さい こと
 て小染に暇を出す事……………(二九)

第十八席

小染小瀧辨天へ世帯を持つて驕奢に耽る事、並に杉田大
こ さい ちち べんてん へ せたい 持つて けうしゃ に たんる こと ならび すぎた ちち

目

第十九席

藏癩病^{くらゐびやうくわんじや}患者^{つか}を使^{つか}つて小染^{こその}の意中^{いちゆう}を試^{ため}す事^{こと}……………(三四)

小染^{こその}怒^{いか}つて杉田^{すぎた}大藏^{おほくら}を罵倒^{のの}する事^{こと}、並に小染^{こその}浦賀^{うらが}へ渡^{わた}つて再び藝妓^{げいしや}となる事^{こと}……………(三三)

第二十席

初代團十郎^{しよだいだん}夢^{らうゆめ}を買^かふ事^{こと}、並に二代目^{にだいめ}の妙技^{めうぎ}兒漢^{えかん}を悔悟^{くわいご}さする事^{こと}……………(三四七)

第二十一席

海老藏^{えびくら}上方^{かみがた}へ上^{のぼ}つて奇才^{きさい}を現^{あら}はす事^{こと}、並に菊五郎^{きくごらう}江戸下^{えどくだ}りの事^{こと}……………(三六二)

第二十二席

音羽屋^{おとはは}火事^{くわじ}の事^{こと}、並に菊五郎^{きくごらう}四代目^{だいめ}團十郎^{だんしやう}に縫^{すが}る事^{こと}……………(三十五)

第二十三席

團十郎^{だんしやう}作^{さく}チヨボクレ^{ちよぼくれ}の事^{こと}、並に團菊^{だんきく}兄弟^{きやうだい}を約^{やく}する事^{こと}……………(三八八)

第二十四席

藤澤^{ふぢさは}の旅宿^{りよしゆく}に小染^{こその}囚人^{しうじん}の杉田^{すぎた}大藏^{おほくら}に邂逅^{かいこう}、今生^{こんじやう}の別れ^{わか}を告^つげる事^{こと}、並にお染^{お染}米國^{まいこく}へ渡^{わた}つて國語^{こくご}教師^{けうし}となる事^{こと}……………(四〇三)

次 終

安政三組盃

小金井 蘆州 講演

第一席

津の國屋お染錦繪羽子板に出る事
並に佐竹の太守お染を御寵愛の事

安政の年間、江戸本所龜戸天神の片ほとりに寓居してゐた浮世繪師歌川豊國といふ人
ありました、これは其の頃の大家で唯今でも描いたものが多く残つて居りますが、爛熟し
た徳川末期の文學者、美術家の中で重きをなした人でございます、この人が人形町の具足
屋といふ繪双紙屋から頼まれて、今度、東都百美人といふものを出すことになりました、
豊國先生も考へたには、モウ自分も晩年だし、何にか浮世に残さなければならぬ、机の上
で考へた、美人でなく生寫しの美人を描いて見やう、といふので主人と相談して、江戸中

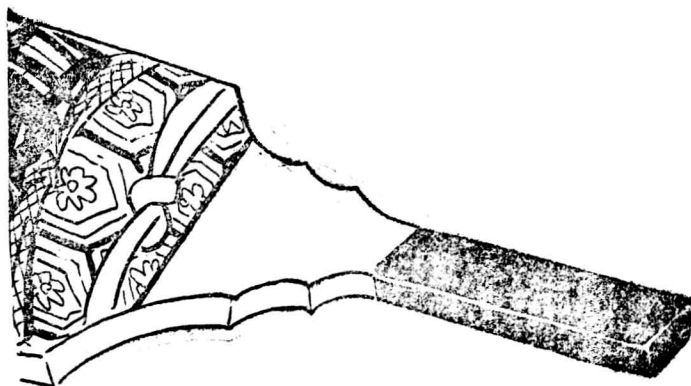
に百人の美人を選んで、其の人の許を尋ねて行き、事情を話して本人の許諾を得て、焼筆ですつかり上書を取つて、それから丹誠を籠めて描き上げて上版をすることになつた、寫生をするのです、今は寫眞といふことが何んにでも應用されて、音響の寫眞には蓄音器といふものがあるし、人の姿を寫すには科學上の寫眞がある、言葉の寫眞には速記術といふ結構なものであるし、其の頃には寫生などといふことは曾てないことですから世の視聽を惹きました、偕て其の百人の美を網羅することになると、其の美人と云へば大方は藝妓とか遊女とか、茶屋小屋の女中とか、乃至は引手茶屋の娘が何にかに止めを刺すのであるが、中にも其の百人の選に入つたのが、神田今川橋の材木商津の國屋惣兵衛の娘お染といふ、十八になる評判娘、堅氣の家の娘であるから、豊國先生自身に具足屋の亭主と同道で往つて、禮を厚く右の事情を打ち明けて、惣兵衛に話しをする、容色良く生れ付いた娘が、錦繪にでも出されるといふことになる、親の身に取つてはどの位もこれが喜ばしいか知れない、二つ返事で承知を致し、早速化粧をさせて其處へ出した、これを残らず下書を取つて戻つて來て、丹精を凝らして出版をした、スルと此の東都百美人といふものが大層な評判で賣れる、實に飛ぶやうに賣れてまいります、其の頃江戸の名物を集めた文句に「武士鯉大名小路廣小路茶見世紫芝居錦繪」其の外に「火事喧嘩伊勢屋稻荷に犬

の糞」あまり良いものはない、けれども東錦繪と云やア江戸名物の最たるもので、遠國の
 者が江戸見物に来て戻つて往く時に、先づ土産として第一番に錦繪を持つて往く、これは
 嵩ばらないで美麗で、お値段もお格好で、類と眞似が外にないといふ所からだ、けれども
 是れは大概女の翫弄物だ、男の翫弄物にはならない、○「マア鳥渡御覽遊ばせ文ちやん、き
 れいちやアなくつて」×「マア眞箇に……音羽屋のお祭り佐七だわ、美しいことねえ」とい
 ふから引つ立つが、昔勇士豪傑が錦繪を弄んだといふ話を聞かない、ところが今度の百
 美人は女が騒がないで男が騒ぐ、男に人氣のあること、云つたら大變だ、日の暮れ方諸職
 人衆が仕事からの歸り掛け、繪双紙屋の前に立つての騒ぎといふものはございません、道
 具箱を肩に辨當箱を手に下げて諸職人衆が繪双紙屋の前に立ち往生をする、○「ヤイ辰、そ
 んなに急ぐねえ、モウ家へ歸つて飯を食つて湯に這入つて寝るばかりぢやアねえか、少し
 繪を見て往けよ」辰「箆棒めえ、子供ぢやアあるめいし、繪双紙などをボンヤリ立つて見て
 居られるけい」○「さうでねえよ、この頃評判の東都百美人てえのがぶら下つてゐるんだ、
 江戸中の百人の別嬪ばかり集つめて描いたんだ、一つ拜んで往けつてんだ」×「ナール程、
 好いのがブラツと並んでやアがるな」○「こりやアな、龜戸の歌川豊國といふけたものが描
 きやアがつたんだとよ」×「ウームさうか、其奴は豪氣だ、一つ見て往かうぢやアねえか」

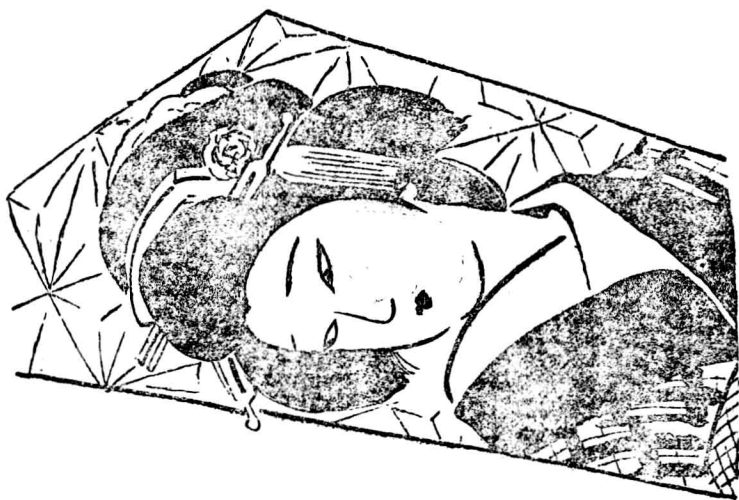
○「一つ、美しい所を見たんで漸と納得しやアがつたせ、今な大層な評判で賣れ盛つてゐるんだ、見や、一番初にあるのは何んだらう、柳橋の藝者だ、梅本の小菊でんだ、好い藝者ぢやアねえか、左り褌ア取つてスーッと立つた姿、これから座敷へ出掛けやうといふ所を描いたんだらうが、何んとも彼とも云へねえなア」○扮装も好し姿と云ひ、年頃から、容色は勿論柳橋ぢやア定めて一二を争つてゐるんだらうが、大したもんだ」×「ウーム」○「藝者は柳橋か山谷堀に限るといふから、其處で一二を争うてえことになれば、江戸で一二なんだからな」小「なる程」○「ヤイ熊ッ、黙つて見てゐねえで、何んとか云はねいか」熊「この位ゐの女に惚れられたら命は要らねえな」○「止せやい、斯ん畜生、つまらねえ所で命を粗末にするねえ、コウ、二枚目のを見ろ、此方の柳橋の藝者とは打つて變つて、恐ろしい極彩色と來てゐやアがる、髪を立兵庫といふ奴に結つて櫛笄を、マア、どうだい、五光のやうに斯う差して美麗ぢやアねえか」×「さうだ」○「錦絲の高縫をした襦袢を着て前帶をしてゐるんだ、伸の町張の花魁だせ、エ、コウ、洲崎万字の唐でんど、一口にいへば女郎だよ、けれども、賣り物買ひ物だからつて、此方等が往つたつて駄目だよ、端口が違うツてんでお逢へはねえや、入山形に二つ星、松の位ゐの太夫職、七十五匁の玉を賣らうツてんだよ、御大名様や何んかのお相手にならうてんだ」×「フーーン、素晴らしい能書き付きだ

の「〇」あたりめいよ、初の藝者とは違つて、鳥渡また趣きが違ふのう、熊どうだ」熊「これ
 なら全く命も要らねえ」〇「オヤ、斯ん畜生、命の掛け持ちをする奴があるかい、コウ／＼
 〇「これなら全く命をうつちやつても口惜しくねえのがある、見ろ三枚目の女を……」
 熊「ウム」〇「こりやアお前なんだ、この頃評判の高い、神田の今川橋の材木屋の嬢でお染
 さんてえんだ、今年十八だ、今川小町辨天娘とまで云はれて、全くの堅氣だよ、商人のお
 嬢さんで、斯うやつて錦繪にまで出るのだ」熊「堅氣のお嬢か、フムーン……」〇「オイ唸る
 ない、見ッ共ねえ、女の藝ごとは何んでも心得てゐる、イヤ、女の藝ばかりぢやアねえや
 武藝十八般、槍でも劍術でも」×「嘘を吐け簞棒奴え」〇「兎も角も高附きに菓子盛つて兩
 手に捧げてゐる所は客の待遇か何にかに出て往くところを描いたんだな成る程、どうもこ
 らへられねえなア」諸職人が斯んなことを云つて宣傳をするんだから、江戸の市中は寄る
 とさはると此の話して持ち切りでございます、餘り評判が高いので、其の年の暮れに照降
 町の明鱗堂といふ際物師が是れを羽子板の押繪につけて出しました、これ亦空前絶後でせ
 う、實業家のお嬢さんが羽子板の押繪に取られるといふことは……大概羽子板なんてえも
 のは、高砂の爺さん婆さんだとか、寶船、さもなけりやア役者の似顔だとかいふものに止
 めを刺す、然し其の時々流行によつて押繪にも種々の變遷がございます、お染は此の羽

子板こいたの押繪おしゑに付けられて以來いらい、誰たれいふとな
 く津つの國屋くにやの羽子板娘はこいたむすめくうはさと噂うはさをした、丁度ちやうど
 其その年としの暮くれの十八日じゅうはちにちのこととでございます、
 今日こんにちは淺草觀世音あさくすくわんぜんおんの年としの市いち、晝間ひるまの内うちから至いた
 つて好いいお天氣てんきです、今いまの下谷したやの竹町たけちやう、從前じうぜん
 の三味線堀さんせんぼり、此處こゝにお上屋敷かみやしきのあつた出羽でわの
 秋田あきた二十四萬石まんごくの佐竹左京太夫さたけさやうだゐふといふ大名だいみやう、
 丁度ちやうど江戸表えどおもてに在勤ざいきんをして居をりました、豫々かれぐう噂はさ
 に聞きいた淺草金龍山觀世音あさくさんりうざんくわんぜんおんの年としの市いち、どうい
 ふものだからト通り見物けんぶつをしたいものだ、と、
 桃井左次馬ももゐさしま、櫻井藤之進さくらゐとうのしんといふ二人ふたりの御近臣ごきんしん
 を連つれて夜よに入いるのを待ち受うけて、御通用門ごつうようもん
 から忍しのびやかに出でて、新堀端しんぼりはたから門跡もんぜきの境内けいだい
 あれを斜はしに抜ぬけて出原町たはらまちの角かどへ來くると、モウ
 人ひとがお天氣てんきが好いいから出盛でさかつて、ゾロくつ



ながつて居る、其の雑沓ざつたふの中なかを縫ぬつてまわり
ます、金殿玉樓きんでんぎよくろうに孤こ々の聲こゑを揚あげて、何なに不
自由じゆうなくお育そだちなすつた大々名だいぐみやう、下したにくで
歩あるいたお方かた、斯かかる人込ひとごみの中なかは臍へその緒切をきつ
て初はじめてだ、結局面けつぐ面白おもしろい位くらゐに感かんじて、那方あちち
此方こちちを見廻みまはしながらやつて来る、モウ茶屋町
へ掛かつて來た時は大變たいへんな雜沓ざつたふだ、其の頃ころは今
と違ちがつて舊家きうかにはそれく家例かれいといふものが
あつて、俺おれの所ところは神田かんだの明神みやうじんの市いちで飾り物かざりものを
買かうんだ、俺おれの所ところは淺草あさくさの市いちだといふ譯わけです
から、遠とほくは麻布あさぶ、赤坂あかさか、四谷よやあたりから、
鳶とびの者ものに草羽織かさはりを着きせて、若わかい者ものに籠長持かごながもちを
擔かがして、さうして此この飾り物かざりものを態々わざわざ買かひ出だ
しに來たものだ、取とり分わけて淺草觀音あさくさくわんおんの市いちと
いへば江戸第一えどだいいちですから附つけ込こみも多い、由



つて賑やかさは一層です、雷門のところから仲見世に這入つて来る、一寸の餘地も争つて
 際物師が見世を並べてゐる、ビュー／＼北風の吹き荒ぶ寒い晩ですが、氣の立つてゐる時
 には寒くもないと見えて、板倉炭がカン／＼起して火燭の酒を煽り、向ふ針卷で、聲を自
 慢と、○「負かりました負かりましたイ、選取つて／＼、注連かかざりか橙かい」×「羽子板
 ちや、羽子板ちやーイ」始めの内は人込みを面白さうに來た佐竹の太守も、今一層の泥糺
 に、あまりといへば苦しくなつて來た、腰押すな、町人共、押しては不可ぬ、コリヤ藤之
 進押すなと申せ」藤ハ、ツ、これ何んで押す」腰町人共、無禮いたすと、手は見せんぞ」
 ○「コウ聞いたか、エ、大きな誤託を吐きやがるぢやアねえか、無禮をいたすと手は見せ
 んと吐かしやアがつたせ、アハ、／＼、○「へん、辰ツ」辰「マア」○「大きなことをいつてや
 アがるせ、この人込みの中へ來やアがつて、塗箸を一本半分差しやアがつて、手は見せぬ
 だとよ、べらんめえ、二本差しが怖くつてどうなるものか、焼豆腐は二本差しでゐるぢや
 アねえか」辰「さうだとも、やつちまへ／＼」藤「御前、恐れながら斯く多數の町人、氣が立
 つて居りますから、左様なことを仰せられましては却つてお宜しうございますまい、暫時
 の間人の透いて居ります所へ、御避難がお宜しう存じます」○「構はねえから押しちまへ
 へ、ウツツ……」×「アリヤ／＼／＼ツ」腰「コレ／＼、さう押してはならぬといふに……」

……面白づくで職人達が態と群集を押し始めた、逐々佐竹の殿様は、羽子板屋の見世先
 きへ押し込まれてしまつた、〇様ア見やがれ、侍だらうが何んだらうが人込みの中で威張
 りやアさうなるんだ、ウワイイ殿どうも藤之進、町人は亂暴ぢやな、成る程氣が立つて
 居ると見える、暫時の間、是れで避難をいたさう「藤恐れながら、それがお宜しう存じま
 す」羽子板屋の見世先の所へ三人の侍が棒のようにヌーと立つた、羽子板屋さんが吃
 驚しちまつた、〇往來く、どうぞお通んなすつて下さい、困つたなア、どうも殿コレ
 く後から突いては不可ぬ、何んで突く」〇突く譯ぢやアございませんが、見世先さへさ
 う立ちはだかつちやア困るぢやアございませんか、今丁度人の出盛つて來て、商いをしや
 うといふ眞ッ最中で、歩いて下さい」藤通れと申したつて斯くの如くの混雜、一寸の
 身動きも出來んではないか、押されて苦しくてならぬ、この雜沓が靜まつて、人がゐなく
 なつたら立ち退くから、それまで此の見世先きを貸してくれ」〇モシく、巫山戯ちやア
 不可ませんよ、今日は高い地代を拂つてね、此處へ出張つて來て商ひをしてゐるんですよ
 人が途切れるまで其處に立つてゐられた日にやア、商賣が出來ませんや、巫山戯つこなし
 ですせ、さういふ譯なら一つ買つて下さい、買つて下さればお客様だ、幾日何十日立つて
 ゐたつて……殿さう長くは立つて居らぬ、佐次馬「佐ハ、ツ」殿この町人の申す所も尤

もである、何品か買ひ上げて得させよ」佐「畏まりました……然らば町人、君命に由つて買ひ上げ得させるぞ」○「へエ、有り難ふ存じます」今までは人に押されて苦しいから、氣も付かなかつたが、思はず振り返つて見ると吃驚したのは、眼も眩むばかりに美しい羽子板が並んでゐる、殿「ヤッ、美しいの、どうぢや何んと美事ぢやのう」佐「御意にござります」殿「綺麗ぢやのう」藤「左様にござります」殿「コリヤ町人」○「へエ」殿「チト尋ねるがのこはれは何んと申すものぢや」○「オヤ、此奴は困つたな、殿様こりやア羽子板でございませア」殿「羽子板と申すと何んに使うものだな」○「へ、愈々困つたね、羽子板を知らなかつた日には仕方がないぢやございませんか、一夜明けると娘ッ子が一イニウ三イと云つて羽根を突くでせう、一トや二タや三やとやるでせう、ほら」殿「アッア、娘子供が追羽根をいたす、これが羽子板と申すものか、さうく予も錦繪で見たことがある」○「驚きましたね、繪で見たてえのは、どうぞお買ひなすつて」藤「ウム、確かと買ひ上げ得させるぞ」殿「余り色々のものが並んで居るので、目移りがいたすが、コートト、どれにいたさうかの……コレく町人、其正面のところに髻だらけな顔をいたして白髪の人、髪を總髪撫で下げにいたして白銀を垂れたるばかりの髻は實に美事だ、年にも恥ぢず、あでやかな所の扮装をいたして居る、其の羽子板を鳥渡取つて見せい」○「何んだか殿様の仰しやる